CINEMA RISE
No.44

RESERVOIR DOGS
レザボアドッグス

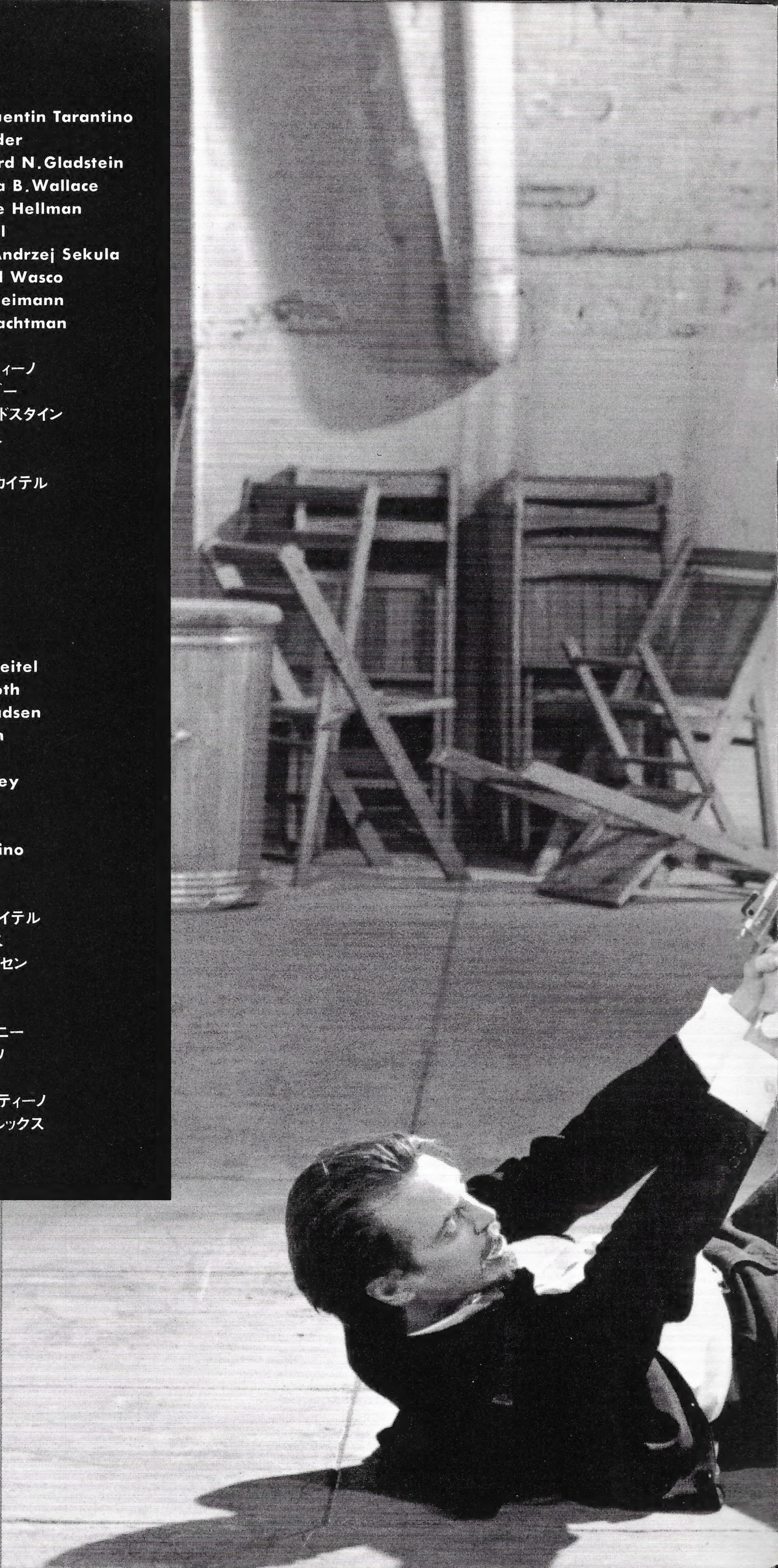


STAFF

Written and Directed by Quentin Tarantino
Produced by Lawrence Bender
Executive Producers = Richard N. Gladstein
Ronna B. Wallace
Monte Hellman
Co-Producer = Harvey Keitel
Director of Photography = Andrzej Sekula
Production Designer = David Wasco
Costume Designer = Betsy Heimann
Music Supervisor = Karyn Rachtman
Editor = Sally Menke
監督/脚本 = クエンティン・タランティーノ
プロデューサー = ローレンス・ベンダー
製作総指揮 = リチャード・N・グラッドスタイン
= ロンナ・B・ウォーレス
= モンテ・ヘルマン
共同プロデューサー = ハーヴェイ・カイテル
撮影監督 = アンジェイ・セクラ
美術デザイン = ディヴィッド・ワスコ
衣裳デザイン = ベッツィ・ヘイマン
音楽監修 = カリン・ラットマン
編集 = サリー・メンケ

THE CAST

Mr. White/Larry = Harvey Keitel
Mr. Orange/Freddy = Tim Roth
Mr. Blonde/Vic = Michael Madsen
Nice Guy Eddie = Chris Penn
Mr. Pink = Steve Buscemi
Joe Cabot = Lawrence Tierney
Marvin Nash = Kirk Baltz
Mr. Blue = Eddie Bunker
Mr. Brown = Quentin Tarantino
Holdaway = Randy Brooks
K-Billy DJ = Steven Wright
Mr.ホワイト/ラリー = ハーヴェイ・カイテル
Mr.オレンジ/フレディ = ティム・ロス
Mr.ブロンド/ヴィク = マイケル・マドセン
ナイスガイ・エディ = クリス・ペン
Mr.ピンク = スティーヴ・ブシェーミ
ジョー・カボット = ローレンス・ティアニー
マーヴィン・ナッシュ = カーク・バルツ
Mr.ブルー = エディ・バンカー
Mr.ブラウン = クエンティン・タランティーノ
ホルダウェイ捜査官 = ランディ・ブルックス
Kビリー DJ = スティーヴン・ライト





RESERVOIR DOGS

HARVEY KEITEL／TIM ROTH／CHRIS PENN
STEVE BUSCEMI／LAWRENCE TIERNEY AND MICHAEL MADSEN

LIVE AMERICA INC. PRESENTS／A LAWRENCE BENDER PRODUCTION IN ASSOCIATION WITH MONTE HELLMAN AND RICHARD N.GLADSTEIN
A FILM BY QUENTIN TARANTINO＝HARVEY KEITEL,TIM ROTH,CHRIS PENN,STEVE BUSCEMI,LAWRENCE TIERNEY AND MICHAEL MADSEN
＝RESERVOIR DOGS／MUSIC SUPERVISOR＝KARYN RACHTMAN／COSTUME DESIGNER＝BETSY HEIMANN
EDITED BY SALLY MENKE／PRODUCTION DESIGNER＝DAVID WASCO／DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY＝ANDRZEJ SEKULA
CO-PRODUCER＝HARVEY KEITEL／EXECUTIVE PRODUCERS＝RICHARD N.GLADSTEIN, RONNA B.WALLACE AND MONTE HELLMAN
PRODUCED BY LAWRENCE BENDER／WRITTEN AND DIRECTED BY QUENTIN TARANTINO
PRESENTED BY PIONEER LDC／DISTRIBUTED BY HERALD ACE,INC.NIPPON HERALD FILMS,INC.／SOUNDTRACK BY MCA VICTOR DOLBY STEREO

1992　トロント国際映画祭　最優秀作品賞
1992　ストックホルム国際映画祭　グランプリ
1992　シチェス映画祭　最優秀監督賞/最優秀脚本賞
1993　ゆうばり国際冒険・ファンタスティック映画祭'93　批評家賞

1991年/アメリカ映画/カラー/シネスコ/ドルビー・ステレオ
6巻2,727m/1時間40分
ライヴ・エンタテインメント製作/ローレンス・ベンダー・プロダクション制作
提供：パイオニアLDC
配給：ヘラルド・エース/日本ヘラルド映画





Mr.ブラウン：「ライク・ア・ヴァージン」は、巨根とやりたい女の歌だ。歌全部が巨根の暗示だ。

Let me tell you what "Like A Virgin" is about...
It's all about a girl who digs a guy with a big dick.
The entire song it's a metaphor for big dicks.













Mr.オレンジ：ラリー、すごく怖いんだ。俺の身体を抱いてくれ。

Larry, this is fucking scary, man.
Would you please hold me ?

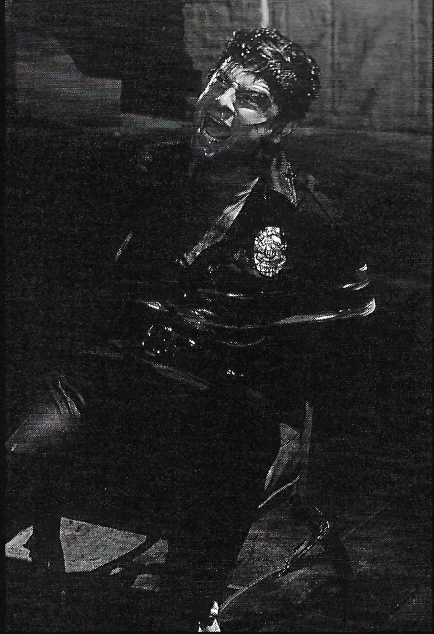


Mr.ピンク：こいつはヤバイ、相当ヤバイぜ。誰かが警察のイヌだ。
Mr.ホワイト：囮捜査だと?

Man, this is fucking up !
Somebody fucked us up "bigtime", man !
——You really think we were set up ?









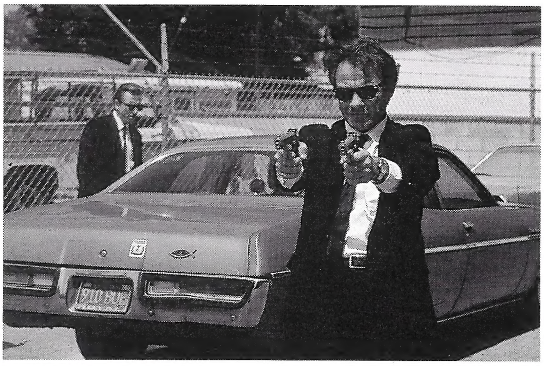


Mr.ブロンド：言っとくが、俺にはボスはいない。俺に命令できる奴なんかいない。
今おまえにできるのは、死を願うことだけだ。そいつは、無理な相談だがな。

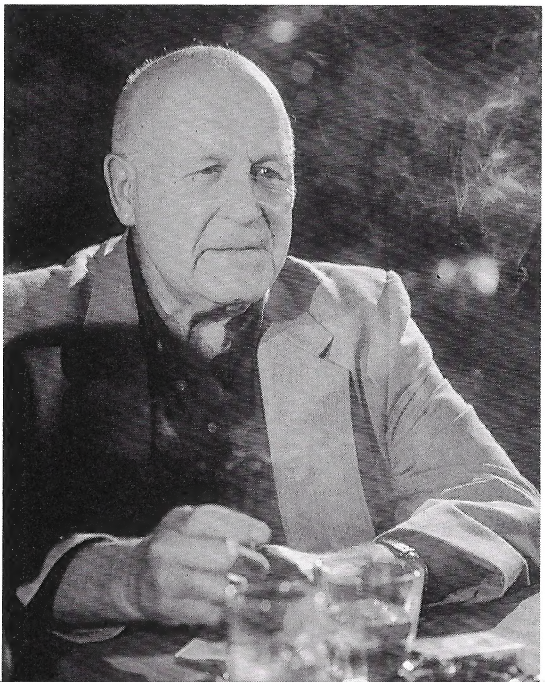
One thing I wanna make clear to you.
I don't have a boss. Nobody tells me what to do.
All you can do is pray for a quick death...
which... you ain't gonna get.











1992年のサンダンス・フィルム・フェスティバルで産声を上げてから今日まで、『レザボア・ドッグス』は世界中に熱狂的な信者を増やし続けている。アメリカはもちろんのこと、その賛辞の声はカナダのトロント、スウェーデンのストックホルム、スペインのシチェスと映画祭の度に広まり、各地で最優秀賞やグランプリなど数々の賞を受賞した。なかでも最大の話題となったのがフランスのカンヌ映画祭である。特別招待作品という形での出品だったため賞こそ逃したが、上映前からポスターやチケットに貼られた「心臓の弱い方はご遠慮ください」というステッカーが否応なく目を引き、いざ上映されるや、作品としての完成度の高さとその過激なバイオレンス描写が注目の的となり圧倒的な絶賛と驚嘆の声がセンセーショナルに駆けめぐることになったのだ。

監督/脚本を手掛けたのは弱冠28歳のクエンティン・タランティーノで、この作品が監督デビュー作となる。タランティーノは俳優としてショービジネスのキャリアをスタートさせたが、その後脚本執筆にもフィールドを広げ、ロバート・レッドフォードが主宰するサンダンス・インスティテュートのディレクターズ・ワークショップ＆ラボで高い評価を得、『レザボア・ドッグス』を監督するというチャンスをものにした。言わば全くの新人監督だが、この作品の成功で一躍彼に対する期待は高まり、既にラリー・ファーガソン、トニー・スコット、オリバー・ストーンが彼の書いた３本の脚本の映画化をそれぞれ進めている。また、タランティーノ自身のプロジェクトも香港の若手監督ジョン・ウーと共同で現在進行中だ。

INTRODUCTION

タランティーノは『レザボア・ドッグス』について、スタンリー・キューブリックの『現金に体を張れ』にインスパイアされたものであり、周到に計画したにもかかわらず結局は失敗する宝石強盗の物語として小説的に再構成してみた、と説明した上で次のように語っている。

「この脚本は、観客が本を読んでいるような感じを受けるように書かれている。それぞれのキャラクターのパートは独立した物語でもあるんだ。誰もがコードネームを持ち、同じ服装をしているが、物語を読み解いていくうちにそれぞれのキャラクターの内面性が浮かび上がってくるだろう？ この映画は強烈であるとともに、どこかしらおかしさが漂ったものなんだ。そしてそれこそ、僕が常々書きたいと思っていた"大衆小説"なんだ。舞台は現代だけど、50年代の雰囲気を持ち、音楽はあえて70年代のものを使ってみた。スクリーンに映し出される動きを際立たせる音楽の効果というものは、とてつもなく凄いものだと僕は思っているよ」

オーディションには、脚本を読んで出演することを熱望した俳優たちが殺到した。主演はこの作品に惚れ込み、映画の共同プロデューサーとしても名を連ねるハーヴェイ・カイテル、イヴニング・スタンダード紙で"いま最も期待される新人"に選ばれたティム・ロス。他に、ショーン・ペンの弟で『ロンリー・ブラッド』にも出演していたクリス・ペン、『ミステリー・トレイン』『バートン・フィンク』のスティーヴ・ブシェーミ、『ドアーズ』『テルマ＆ルイーズ』のマイケル・マドセンなど。いずれも一度見たら忘れられないほど強烈な個性を持った俳優たちが集まっている。

THE STORY

降り注ぐ陽光とは裏腹に、一歩裏通りへ入れば犯罪と欲望がうごめく——巨大都市ロサンゼルスで犯罪プロフェッショナルを集め、数々の悪事に手を染めるジョー・カボットはいままた人数を揃え、大がかりな宝石強盗を計画している。

息子のナイスガイ・エディとともに集めた６人の男たちには全員犯罪歴があり、彼らはブラック・スーツにブラック・タイ、真っ黒なサングラスが義務づけられた。計画を成功させるため、お互いの素性を明かしてはならないというのが、ジョーのやり方だ。彼らにはコードネームが付けられ、それぞれMr.オレンジ、Mr.ブロンド、Mr.ピンク、Mr.ブルー、Mr.ブラウンと呼び合うことになった。彼らは約束された報酬のため、また宝石強盗をうまくやり遂げるため、名前さえ知らない仲間たちとある種の絆で結びついているのだ。

襲撃直前、猥雑な会話で時間をつぶす男たち。計画は用意周到で、非の打ち所が無いように思われたが、襲撃現場には多数の警官が待ち伏せし、万全の体制が敷かれていたのだ。腹部に銃弾を受けた瀕死のオレンジを抱え、やっとのことで集合場所の倉庫に辿り着いたホワイト。続いて一人逃げ延びたピンクが到着し、彼の話からブラウンが逃走の途中で死に、ブルーが行方不明になったことを知る。ジョーとエディに連絡を取り、なんとかその場から脱出する計画を練ろうとするホワイト。しかし、同時に仲間への不満と疑惑が浮かび上がる。仲間の中に裏切り者がいるのではないか——

そうこうするうちにもオレンジの状態はますます悪化し、血の海でのたうちながらホワイトに助けを求めている。オレンジとの間に友情が芽生えてきたホワイトは、彼をなんとか医者に看せようとピンクに提案するが、そんな危ないことは出来ないと拒絶され仲間の絆は綻びはじめるのだった。

そこへ、縛り上げた警官を手土産にブロンドが戻ってきた。警察の手際があまりにも良かったことから、仲間に裏切り者がいることを確信しているブロンドは、その警官に誰が裏切り者かを吐かせようというのだ。襲撃現場でのブロンドの突然の拳銃の乱射に怒り狂っていたホワイトだが、とりあえず真相を知ろうと警官を殴りつけているところへエディがやって来た。計画の失敗をジョーが怒っており、仲間には裏切り者などいないというのだ。互いの不信は消えないが、ピンクが逃走中に隠してきたダイヤモンドを取りにいこうとエディ、ホワイト、ピンクの３人が倉庫を出ていく。残されたのは瀕死のオレンジ、警察官とブロンドだけ。３人がいなくなるとサディストのブロンドは、裏切り者の名前を吐かせるだけでなく、拷問を楽しむためにラジオのボリュームを上げ、剃刀とガソリンを取り出した。

果たして彼らは逃げきれるのか、裏切り者は誰なのか——











純粋活劇精神が熱く沸き立つ

山根貞男(映画評論家)

いよお、やるじゃないか…！

クエンティン・タランティーノの『レザボア・ドッグス』を見て、そう思った。全篇をつらぬくピチピチ新鮮な映画魂の疾走ぶりに感嘆したのである。

この映画魂は、より正確には、活劇精神と呼ぶべきものであろう。アメリカの弱冠28歳の監督が、デビュー作として、宝石ギャング８人組の仲間割れの闘いを描く素晴らしい映画を撮った。そこに見られる純粋活劇精神の熱い沸騰こそが、やるじゃないか、との思いを刺激せずにはおかない。

冒頭、８人の男どもがレストランで、マドンナの「ライク・ア・ヴァージン」の意味についてえんえん猥談をくりひろげ、そのあげくに、チップを出す出さないでもめる。会話の卑猥さ、面構えのふてぶてしさ、一瞬も留まることなく右に左に揺れるキャメラの流動性など、いずれも興味をそそるが、いったいどんな映画がはじまるのだろうと戸惑わせもする。その思いは、しかし、つぎのショットでたちまち薄れ、外に出て歩く男どもを逆光ぎみにとらえた画面が、フィルム・ノワールふうのハードボイルドの気配をかもしだす。そして、カットが変わるや、いきなり宝石強盗に失敗した直後の血まみれの逃走シーンがはじまる…。

この意表をつく導入部は、みごとというほかない。そしてそこにこの映画の魅惑が鮮明に象徴されている。

ギャングどもが仲間割れをして殺し合う映画など、まったく珍しくはなかろう。ところがここでは、肝心要の襲撃シーンを描かぬまま、その直後からドラマが語られてゆく。ごく常識的にいって、派手な襲撃失敗シーンを欠いていれば、アクション映画としての面白さが弾けなさそうに思われるが、そうではなく、サスペンスたっぷりの勢いが全篇に満ちあふれている。自らオリジナルシナリオも書いたこの新人監督の企みの卓抜さが、そこにくっきり浮かび上がってくるのである。

クエンティン・タランティーノは、ギャング８人組の仲間割れのドラマを通常の形から解体し、大担かつ緻密に再構成した。

いきなり逃走シーンからはじまるため、最初は何が何だかわからない。集合場所の倉庫のシーンになり、二人、三人、四人と、メンバーが増えるにつれ、わずかに事態が見えてくるものの、まだ輪郭はおぼろげな闇に沈んでいる。そこで、見る者は目を凝らし耳をそばだてずにはいられない。と、この輪郭のぼやけ具合は、まさしくギャングどもの疑信暗鬼の反映にほかならないと納得できる。そのあと、各人の言動と回想により、男たちの個性が

際立つとともに、少しずつ事態の全容が浮かび上がる。そして、すべてがすっきりと判明したなと思った瞬間、衝撃的なクライマックスが襲いかかってくる…。

いま、全体の流れをおおまかに整理してみたが、ここで注目すべきは、画面とそれを見る者の意識が追いつ追われつ展開をくりひろげることであろう。

その葛藤こそが面白さを生み出す。ドラマの分解による混沌と、それを緻密に再構成してゆく計算。この二つが合わさって、映画的な興奮を結晶させるのである。襲撃シーンはついに出てこないが、むしろ描かれないことで鮮やかに見えてくる。明らかにそれはこの新人監督がどれほど観客を信頼しつつ挑発しているかを語っていよう。文句なしのキャスティングといい、みごとに抑制の効いた描写のハードボイルド・タッチといい、あらためて28歳という若さの才能に感嘆せずにはいられない。

聞くところによれば、クエンティン・タランティーノがもっとも好きな監督は深作欣二だという。そういえば、この『レザボア・ドッグス』は『いつかギラギラする日』を思い出させる。むろん製作日から考えて、タランティーノが深作欣二のあの傑作を事前に見ているわけはないが、海を隔てた新人とベテランの作品に共通するのは、なにもドラマの中身だけではない。映画の面白さをめざして疾走するときの勢いにおいてこそ、両者の類似性がうかがえるのである。

もう一度、この作品のあり方に目を向けよう。あらかじめ分解されたドラマが、個々の描写の積み重ねにより、少しずつ形を現わして、意表をつく展開をしたあげく、ショッキングな結末へ至る。このとき、面白いのは単純にそのドラマの内容ではない。欲望と裏切りと友情の絡み合うドラマもむろん刺激的ではあるが、それにもまして、そうしたドラマをじんわりスリリングに浮かび上がらせてゆく過程に、見る者の心を真に躍らせる力があふれみなぎっている。

物語の過激さより、それを描く過程の過激さ。深作欣二の作品にあるのも、まさにそれにほかならない。そして、描写の過程が力を発揮するとは、すなわち純粋な活劇としての素晴らしさを意味する。

タランティーノがドラマをいったん解体したのは、古典的な語りを信じることができないからであろう。そこには映画の〝現在〟が顔をのぞかせている。

そんな域にまで純粋活劇精神を沸き立たせたこの新作監督は、やっぱりスゴイ！







映画「レザボア・ドッグス」は、ドラマが動きだしてから結末の一歩手前までは、まず何よりも、アイデアや技巧といったものがもたらす効果に目を奪われる作品である。特に素晴らしいのは、過剰と欠落の絶妙のバランスが生みだす効果だ。

たとえば、この映画に登場するギャングたちは、黒のスーツに黒のタイというスタイルで統一され、お互いに色のコードネームで呼びあう。これは、彼らを無個性化するような欠落の要素だ。しかし、ひとたび彼らの関係に亀裂が入り、それぞれの思惑が浮かびあがってくるようになると、逆に、彼らの個性、そして、お互いの気持ちのずれや反発を強調する要素へと反転する。

あるいは、この映画には、問題の宝石強盗の場面がまったく描かれない。これもまた欠落の要素だが、ひとたび計画が失敗に終わり、裏切者がいるとわかったとき、かみあうことのない証言を通して、ひとりひとりの人間をより強調する要素へと反転する。

さらに付け加えるなら、この映画の舞台は、集合場所の倉庫からほとんど動かない。この演劇的な要素は、ある意味では、映画的な要素の欠落ともいえる。そして、この欠落もまた、場の不穏な空気を盛りあげる効果をもたらしている。



そうしたアイデアが密接にからみあうドラマの効果には、当然のことながら目を奪われてしまうが、映画の結末を目にしたとき、ぼくは、アイデアの効果云々ではなく、まったく別なポイントからこの映画を振り返ってみたくなった。

この映画は、冒頭の男たちのユーモアたっぷりの会話を除くと、ホワイトと重傷を負ったオレンジが必死で倉庫へと向かう場面から始って、オレンジが自分の正体を告白し、ホワイトが銃の引き金を引く場面がクライマックスになる。

ぼくは、この映画は、お互いにとりたてて特別な感情をいだいているわけではないが、奇しくもふたりで逃走するはめになった男たちが、他の男たちの思惑が複雑にからみあうドラマのなかで、いかにしてそうした結末に至ることになるのかを渇いた視点で浮き彫りにしていくハードボイルドな作品ではないかと思う。

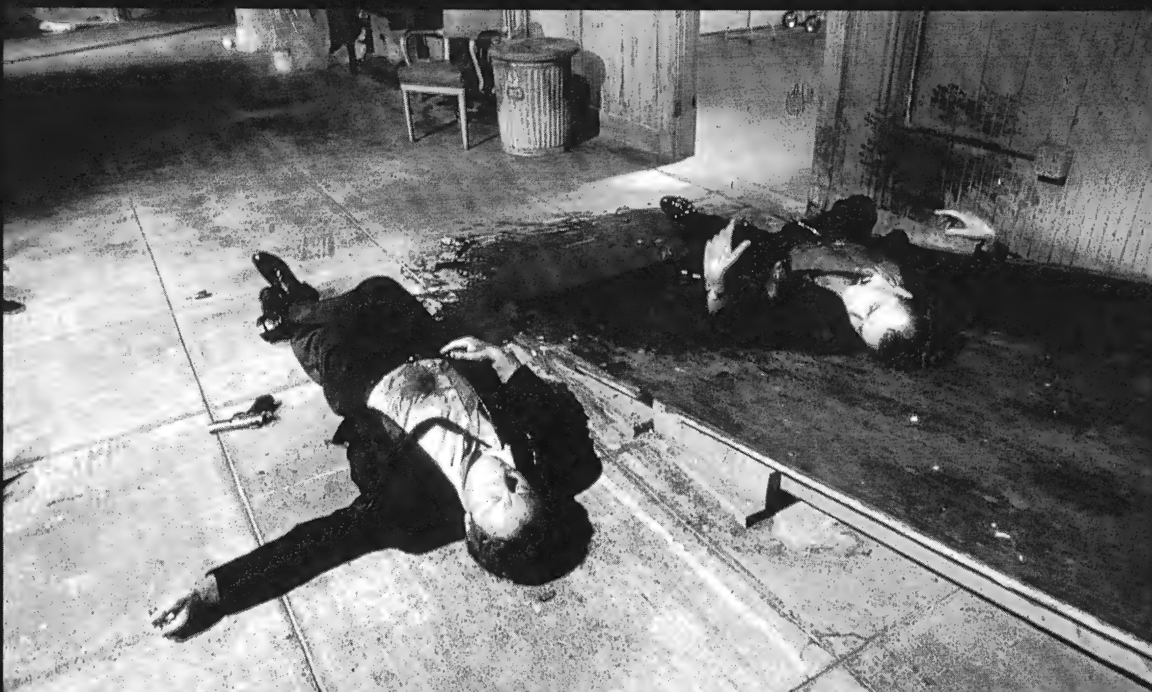
もっとはっきりいってしまえば、これは、逃走の最中に、重傷を負っている仲間に自分の本当の名前をもらしてしまったホワイトが、オレンジに引き金を引くまでの感情の揺れを克明に描いた映画である。

オレンジに対するホワイトの感情を友情ととらえる人は多いことだろうが、ぼくは、この映画は断じてそうはいっていないと思う。この映画の中盤には、計画の実行以前のホワイトとギャングの元締めであるジョーの会話が挿入されているが、その内容は、ホワイトが、ある人間と何度か仕事をすると相手を変えるタイプのギャングであることをほのめかしている。彼は、決して一匹狼ではないが、誰かとへたに心が通じ合うことを拒絶している人間なのである。ホワイトは、オレンジに友情を感じるのではなく、彼の存在を自分の運命であるかのように背負うのである。

ぼくは、ホワイトという役柄は、間違いなくハーヴェイ・カイテルのためだけにある役柄であると思う。彼が、キャストにとどまらず、共同プロデューサーに名のりをあげているのもうなずける。



ホワイトの感情の揺れを克明に描いたハードボイルド
大場正明（映画評論家）



ハーヴェイ・カイテルは、俳優として、屈折、狂気、二面性、エキセントリックといった形容がふさわしい魅力を放ち、「レザボア・ドッグス」は、スコセッシの「ミーン・ストリート」以来、久しぶりに、彼の最も深いところにある魅力がにじみ出た作品といっていいだろう。

「ミーン・ストリート」が、カルト的な魅力を放っているのは、何といっても、救いがたいほどクレイジーなロバート・デ・ニーロ扮するジョニー・ボーイとカイテル扮するチャーリーの結びつきが、幼なじみの友情にとどまらない関係として描かれていたところである。

この映画の冒頭では、チャーリーの心のなかに潜むこんな言葉が綴られる。「教会で罪はあがなえない。我々は町や家庭で罪をあがなう。それ以外はまやかしだ」。彼は、教会に並ぶろうそくの炎や火のついたマッチに自分の手をかざし、自らに罰を科す。しかし、彼が自分に科す最も大きな罰は、破滅を予感させるジョニーを自分の運命として背負うことだ。彼は、ジョニーの姿を見て自分の罰がやって来たと心の中でささやくのである。

「レザボア・ドッグス」のホワイトには、罪の意識云々といった表現があるわけではないが、この映画のカイテルの存在感は、あのチャーリーを彷彿させる。ぼくには、カイテル扮するホワイトが、ロスの薄汚れた倉庫という教会で、自らの鮮血によって罪をあがなうように見えるのだ。

HARVEY KEITEL
= MR. WHITE



ハーヴェイ・カイテル〈Mr.ホワイト〉
HARVEY KEITEL as Mr. White/Larry

ヤクザ、刑事、ヒモなど、ハードな役ばかりでキャリアを築き、スコセッシはじめ好みの監督作に熱心に関わり、常に〝反抗的〟〝アウトサイダー〟と評される。その25年にわたる脇役人生は、すでにカルト・ヒーローとしての地位を得た今、ようやく上昇気流に乗ったようだ。

1935年5月13日、ギャングの温床、ニューヨーク郊外ブライトン・ビーチに生まれ、貧乏と暴力、ドラッグとアルコールに囲まれたストリート・キッズの一人として育つ。17歳の時、そんな境遇から逃げようと、海兵隊入りする。3年後、除隊。20歳の時に靴のセールスマンを経て、マンハッタン刑事裁判所の速記係になった。その後、アクターズ・スタジオに入る。ステラ・アドラー、リー・ストラスバーグらに学び、オフ・シアター、ニューヨークのアバンギャルドシアター「カフェ・ラ・ママ」で舞台に立つ。サム・シェパード、アーサー・ミラーの作品にも出演した。その後、ニューヨーク大学に入学。生涯の友マーチン・スコセッシと出会う。68年、スコセッシの長編第一作「WHO'S THAT KNOKING AT MY DOOR?」で主役デビュー。5年後、スコセッシの出世作『ミーン・ストリート』に主演、批評・興行ともに大成功を収める。その後、『アリスの恋』、オスカー4部門にノミネートされ、カンヌ映画祭でグランプリに輝いた『タクシー・ドライバー』、『最後の誘惑』などデ・ニーロと並ぶスコセッシ作品の〝顔〟として活躍。

好きな監督作品に意欲的に出演。ロバート・アルトマンの『ビッグ・アメリカン』、アラン・ルドルフの『ロサンゼルス それぞれの愛』、ジェームズ・トバックの『マッド・フィンガーズ』、ニコラス・ローグの『ジェラシー』、ポール・シュレーダーの「BLUE COLLAR」などの異色作に登場している。ルドルフ、トバック、シュレーダーについては監督第一作目。彼は度々、新人のデビュー作に熱意を示し、今回のタランティーノの『レザボア・ドッグス』の場合のように、プロデューサーとして名を連ねたりすることもある。このためリドリー・スコットに熱烈なラブコールを受け、スコットの初監督作『デュエリスト—決闘者—』に主演した。同作は絶賛を博し、スコットの輝かしいデビューに一役買ったカイテルは、その後、『テルマ&ルイーズ』にも出演、コンビは再び、批評家の絶賛を浴びることになる。

そして狭まった活動範囲を広げるため、ヨーロッパへ渡り、ベ



ルトラン・タヴェルニエの『ＳＦ/デス・ブロードキャスト』、エットーレ・スコラの『革命輪舞曲(ロンド)』、リナ・ウェルトミューラーの「CAMORRA: A COMPLICATED STORY OF STREETS」などの作品に出演した。

その後、『恋におちて』など数多くのハリウッド・エンタテインメントで魅力的な脇役で印象づけた。最近は、ジャック・ニコルソン監督・主演の『黄昏のチャイナタウン』、アラン・ルドルフの『愛を殺さないで』、そしてオスカーにノミネートされたバリー・レビンソンの『バグジー』などいくつもの素晴らしい助演の演技で、その実力を見せつけた。最新作は『キング・オブ・ニューヨーク』のアベル・フェラーラの2本。「BAD LIEUTENANT」は公開とともにカルト化した異色作。もう1本はマドンナと共演する「SNAKE EYES」。そして92年の大穴、ウーピー・ゴールドバーグと共演した『天使にラブ・ソングを』が公開中。

私生活は謎で、かつて『グッドフェローズ』などで知られる女優ロレイン・ブラッコと結婚していたことがある。

【フィルモグラフィ】

「WHO'S THAT KNOKING AT MY DOOR?」(68)、『ミーン・ストリート』(73)、『アリスの恋』「THAT'S THE WAY OF THE WORLD」(75)、『タクシー・ドライバー』『走れ走れ救急車』『ビッグ・アメリカン』(76)、『ロサンゼルス それぞれの愛』『デュエリストー決闘者ー』(77)、『マッド・フィンガーズ』「BLUE COLLAR」(78)、『SF/デス・ブロードキャスト』(V)、「EAGLE'S WING」(79)、『ジェラシー』『スペース・サタン』(80)、『革命輪舞曲(ロンド)』(81)、『ボーダー』「COP KILLER」(82)、「EXPOSED」「UNE PIERRE DANS LA BOUCHE」(83)、『恋におちて』(84)、「CAMORRA: A COMPLICATED STORY OF STREETS」「EL CABALLERO DEL DRAGON」「LA SPOSA AMERICANA」(85)、『オフ・ビート』「WISE GUYS」『メンズクラブー真夜中の情事ー』(V)(86)、『ピックアップ・アーチスト』『ディア・アメリカ』「BLIDESIDE」「L'INCHIESTA」「HELLO ACTERS STUDIO」(88)、『ニューヨーク・ストーリーズ』『乙女座殺人事件』『最後の誘惑』『マスターズ・オブ・ホラー/悪夢の狂宴』(89)、『黄昏のチャイナタウン』(90)、『愛を殺さないで』『テルマ&ルイーズ』『バグジー』(91)、『天使にラブ・ソングを』「BAD LIEUTENANT」(92)、「SNAKE EYES」(93)

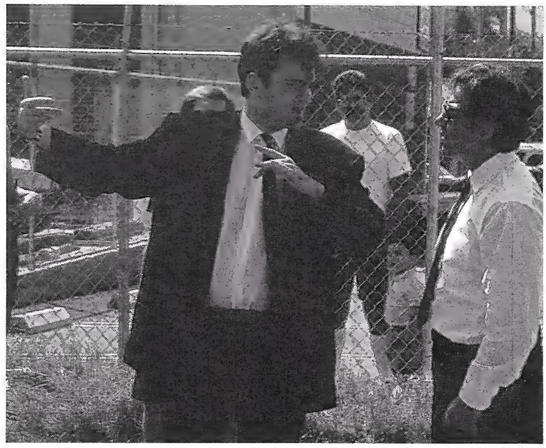


「犯罪映画を日常生活の時空、リアリティの中に落とし込んでみたかった」──みごとに整然と構築された劇的空間。そこに〝ありそうなこと〟が小気味よく息づく快作『レザボア・ドッグス』の成り立ちを振り返る監督クエンティン・タランティーノの言葉はまさに奔流然と溢れだし気づいてみれば1時間の約束の取材は3時間をこえていたのだった。この取材で彼が示した汲めども尽きぬ泉のようなエネルギー、あるいは満杯の空気を孕んで尚も、膨らみ続ける風船にも似たテンション、その圧倒的な持久力が映画の緊密な口調を支え濃厚な感情のリアリティを紡ぎだす。そんな彼が「ちょっと『羅生門』的かもしれないけれど、ひとつの現実が異なる視点をもつ人を介して幾通りにも見えてくるっていうのもこの映画で描いてみたかったんだ。観客は登場してくる連中の話を見聞きしながら彼等の真実を探ることになる」というのに倣い、それぞれに語る〝犬たち〟の証言を記して『レザボア…』とタランティーノの正体を探る試みに変えてみたい。



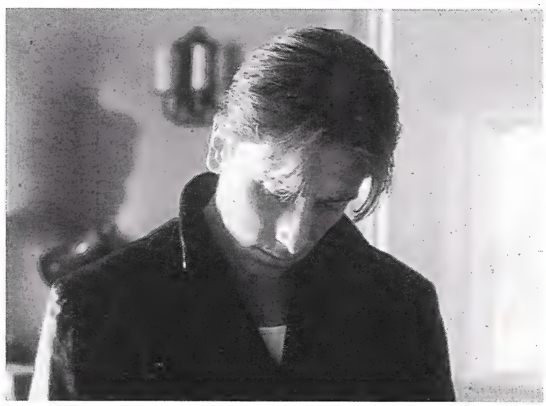
Mr.ホワイト＝ハーヴェイ・カイテル

脚本を読んですぐにこれは違うぞと感じ、連絡をとった。まだ製作費が集まらないって状態だったが、とにかく彼の会いたい俳優にはすべて会わせてやりたいと思ってね、NYでオーディションする金がないというから旅費とホテル代を出したんだ。カリフォルニアを出るのはこれが初めてだなんていってたな。クエンティンの脚本には贖罪とか友情とか私が演じることで続けてきた自己探求の旅に連なる神話的なテーマがあった。「ミーン・ストリート」や「最後の誘惑」にも通じるテーマ。それを語る全く新しい方法を備えていた。だからこそ是非とも協力したいと思ったんだ。



Mr.オレンジ＝ティム・ロス

血まみれの演技に関してはリハーサルなしでやらせて欲しいと主張を通させてもらった。ハーヴェイも賛成してくれて、車中でのシーンは台詞は脚本のままだけれど肉体的な部分は即興で出てきたものだった。アメリカじゃ血生臭い面ばかりが取り沙汰されてるけれどヨーロッパでの反応は違っていた。サムライにも似た男たちのラブ・ストーリーに関心が集まった。ヨーロッパ出身の人間として僕が惹かれたのもそういう部分だった。ただこれってアクションも台詞も全く変えずに女だけの話にするっていうのも可能だよね。クエンティンともそれはずっと話してたんだ。『レザボア・ビッチズ』ってさ。最高じゃない。



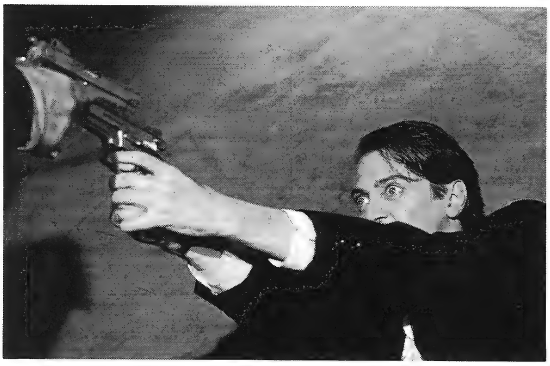
レザボアの犬たちが語る舞台裏

川口　敦子(映画評論家)

Mr.ピンク=スティーヴ・ブシェーミ

当初、僕にはナイスガイ・エディをってことだったんです。でも、結局、ピンクになってよかったと思ってますよ。クエンティンにとってはキャスティングがもう、演出みたいなものなんですね。僕としてはこの役の常にプロフェッショナルであろうとする部分に惹かれました。いわゆるタフガイじゃないのに生き延びてしまう賢さって部分も面白いな、と。クエンティンは本番では殆ど指示を出しませんね。リハーサルでみっちり話し合ってますから。ただあの倉庫で血まみれのオレンジに出くわす部分は血糊を使ってリハーサルしてたわけじゃありませんからね。本番で初めて血をみたんです。(笑)で、狼狽えまくるってかんじに演じたら、最初は動じても即、ビジネスに戻るのがピンクだというんですよ。しめる所はそうやってしめる。そんな彼の熱気がすごく気持ちよかったですね。







ナイスガイ・エディ=クリス・ペン

この映画でクエンティン以下、本当の友達にめぐり会えたのが僕には大きかった。特に親父役のL・ティアニーは最高だった。初対面の時、そのうち遊びにきてよといったらさ、翌日の朝 9 時に、いきなり家はどこだって電話。で、本当に押し掛けてきた。それから帰りの車の中でまた突然、庭園用の家具はいるかってきくんだ。いらないといっても聞く耳もたずでハリウッドのアパートに着くなり奥から紙袋にあれこれ詰め込んできて持ってけって。本当にいらないといってもだめで、じゃせめて俺が出た映画のビデオは持ってけって 2 本よこして、家具も一緒にくれようとするんだ。ぼけてるんじゃなく彼一流のユーモアなんだな、これが。それが判らない連中もいたけど僕は大好きだった。タフで頑固なアイルランド系親父の典型でさ、78歳だけど今だに殴り合いしたら誰にも負けないよ。

Mr.ブロンド=マイケル・マドセン

図体ばっかりおっきな子供みたいな奴だよクエンティンってやつはさ。こんなガキが監督で大丈夫かって思ったけど書いたものは凄かった。俺としてはピンク役がやりたかったんだよな、実は。ブロンドは撮影一週間前までもひとつ本気になれなかった。タフガイ・イメージを『テルマ&ルイーズ』でやっとで抜け出せたかなってとこだったから。例の拷問の場面は 2 日間かけて撮ったんだけどクエンティンがリアリティとかいってさ、警官役の小僧を椅子に縛りつけたまま置き去りにしてみんなでメシに行ったりしたんだよな。低予算だからいちいち縛り直してる時間が惜しいっていうのもあって、撮影中は縛りっ放しだったし、気の毒したよな。でも車の中のトランクに押しこめられて走るってどんな気分でしょうねと言い出したのは向こうの方だからな。希望通り走ってやったら相当こたえたみたいだった。リアリティだよ、リアリティ、うん。

('93年1、2月　LA.NYで取材)







ティム・ロス〈Mr.オレンジ〉
TIM ROTH as Mr. Orange/Freddy

イギリスの今もっとも注目すべきアクター。スティーヴン・フリアーズの『殺し屋たちの挽歌』の演技でロンドンのイヴニング・スタンダード紙から「いまもっとも期待される新人」に選ばれた。『レザボア・ドッグス』では生粋のロサンゼルスっ子を演じるためにイギリス風アクセントを隠している。

ロンドン生れのロスは、当初大学で彫刻を学んでいたが、途中、小劇団に入り、出演を重ねていく。同時にテレビ映画にも惹かれ、ゲイリー・オールドマンと共演した『ミーン・タイム』は高い評価を受けた。

その後、スティーヴン・バーコフ演出のカフカ作『変身』の舞台で主演、BBCのテレビ番組でも同じ役を演じ、目の離せない存在となった。

映画の出演は、クリス・メンゲスのアパルトヘイトを扱った『ワールド・アパート』の記者役、ピーター・グリーナウェイの『コックと泥棒、その妻と愛人』の凶悪な泥棒の手下役で強烈な印象を残した。そして役者を見る目には定評のあるロバート・アルトマンの『ゴッホ』では難役のゴッホ役が与えられた。彼はその期待に見事に応え、多くの雑誌、新聞でその特集記事が組まれるほど、高く評価された。

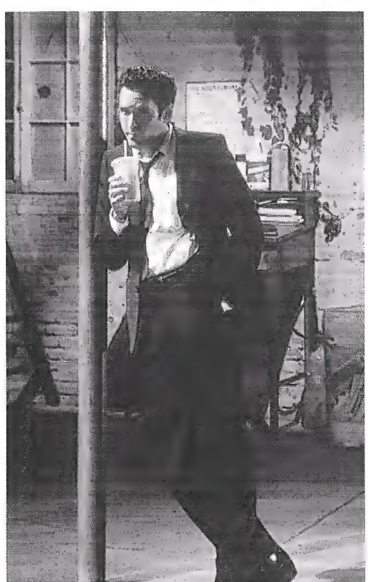
その後、カンヌ映画祭で上映されたサビーヌ・プラングジーナによるフランス映画「FARENDI」でも熱演。続いて、劇作家トム・ストッパードが自作の戯曲で監督デビューを果たし、ヴェネチア映画祭グランプリを受賞した『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』ではローゼンクランツを演じ、同作のキャンペーンで91年初来日、その類まれな知性と整った顔立ちは女性ファンを魅了した。

なお、ロスは最近、ロンドンを離れロサンゼルスに在住。時にはシナリオも書いているという。

【フィルモグラフィ】

『殺し屋たちの挽歌』(84、V)『ワールド・アパート』(88)、『コックと泥棒、その妻と愛人』(89)、『ゴッホ』「FARENDI」(90)、『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』(91)、「JUNPING AT THE BONEYARD」「BACKSLADING」「BODIES, REST & MOTION」(92)





マイケル・マドセン〈Mr.ブロンド〉
MICHAEL MADSEN as Mr. Blonde/Vic

凶悪な役が似合いすぎる男。リドリー・スコットの『テルマ&ルイーズ』でのルイーズのやくざな恋人ジミー役は記憶に新しい。

映画デビューは『ウォー・ゲーム』。以降、『もう一度殺して』『ナチュラル』『ドアーズ』とヒット作に出演。また『レザボア・ドッグス』の製作総指揮モンテ・ヘルマンの監督作で、ベネチア映画祭で批評家賞を受賞した「IGUANA」にも主演している。テレビ出演も多い。『マイアミ・バイス』『クライム・ストーリー』などに頻繁に出ている。

シカゴ出身。キャリアのスタートは、有名なステッペンウルフ・シアター。当時、そこで監督をしていたジョン・マルコビッチから、指導を受ける。「欲望という名の電車」などで舞台を踏んだ後、ロサンゼルスに移る。

マドセンの母は、エミー賞受賞の脚本家兼プロデューサーのエレイン・マドセン、妹は『ホット・スポット』『キャンディ・マン』で知られるセクシー女優バージニア・マドセン。

最新作は、チャーリー・シーン主演の「FIXING THE SHADOW」。マドセンは暴走族のリーダーを演じる。

【フィルモグラフィ】

『ウォー・ゲーム』(83)、『ナチュラル』『月を追いかけて』(84)、『パーフェクト・ストレンジャー』(85)、「IGUANA」(88)、『もう一度殺して』『ドアーズ』(91)、「STREET TALK」(91)、「FIXING THE SHADOW」(92)

THE CAST



クリス・ペン〈ナイス・ガイ・エディ〉
CHRIS PENN as Nice Guy Eddie

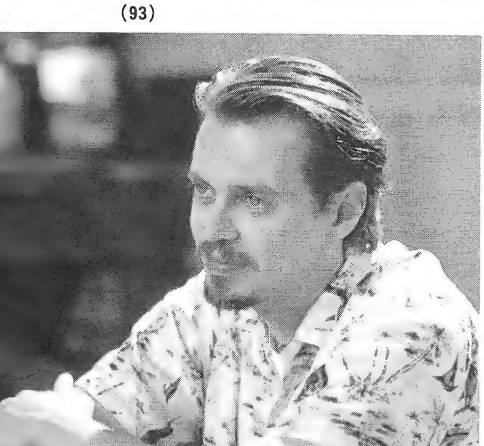
ペンは芸能一家の一員。父は監督のレオ・ペン、母は女優のアイリーン・ライアン、兄は俳優であり監督のショーン・ペンとミュージシャンのマイケル・ペンである。

12歳のときから演技を学び、13歳の時には、早くも脚本、監督、製作を手掛け、出演も果たしている。

デビューはフランシス・F・コッポラの『ランブル・フィッシュ』。続いて、『フットルース』『ペイルライダー』、兄のショーンと共演した『ロンリー・ブラッド』、そして『モブスターズ 青春の群像』では親友を裏切るギャングを貫禄たっぷりに演じ、着実な成長を印象付けた。次回作は、ポール・マザースキーの「THE PICILE」。

オフの時には、いつもマイク・タイソンについてボクシングのトレーニングを行っており、近く予定されるプロとしての初試合に備えている。

【フィルモグラフィ】
『ランブル・フィッシュ』『トム・クルーズ 栄光の彼方に』(V)(83)、『フットルース』『ワイルド・ライフ』(84)、『ペイルライダー』(85)、『ロンリー・ブラッド』(86)、「LEATHER JACKETS」(87)、『モブスターズ 青春の群像』(91)、「THE PICILE」(93)



スティーヴ・ブシェーミ〈Mr.ピンク〉
STEVE BUSCEMI as Mr.Pink

ブシェーミの奇妙な存在感を際立たせたのはジョエル&イーサン・コーエン兄弟だった。『ミラーズ・クロッシング』では小心なホモのミンクを、そして91年カンヌ映画祭で3冠独占した『バートン・フィンク』では親切なフロントのチェットを演じ、「美形なのにどこか無気味」な忘れられない強烈な印象を残した。

映画のキャリアは86年、USA映画祭の作品賞を受賞した「PARTING GLANCES」の主役で始まった。その後、ジム・ジャームッシュの『ミステリー・トレイン』、『ニューヨーク・ストーリーズ』のスコセッシの一話など脇役ながら、作品選びの、そして役柄にセンスが感じられる。

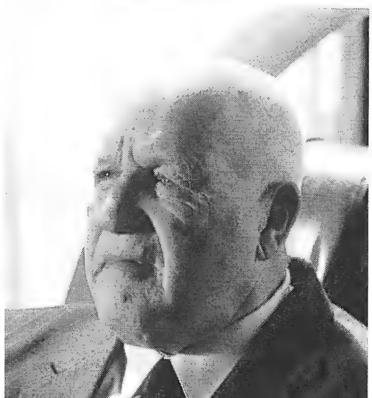
もともと、一人芝居のコメディアンを志望していたが、次第に俳優に魅力を感じ、ニューヨークのアクターズ・スタジオの名門リー・ストラスバーグ・インスティテュートで半年、ジョン・ストラスバーグのもとで2年間師事した。

その後、数多くのオフシアターに出演する一方で、『マイアミ・バイス』などテレビ映画にも出演。

最新作は、ジェニファー・ビールス共演の「IN THE SOUP」、クリス・メンゲス監督の「CRISS CROSS」、ケバ・ローゼンフィールド監督の「TWENTY BUCKS」が待機している。

生れはブルックリン。現在は妻子とともにマンハッタンに住んでいる。

【フィルモグラフィ】
「PARTING GLANCES」『バイブス 秘宝の謎』(86)、『フロム・ザ・ダークサイド』『ニューヨークの奴隷たち』『ミステリー・トレイン』(89)、『ミラーズ・クロッシング』(90)、『バートン・フィンク』(91)、「IN THE SOUP」「CRISS CROSS」「TWENTY BUCKS」(92)



ローレンス・ティアニー〈ジョー・カボット〉
LAWRENCE TIERNEY as Joe Cabot

味のある性格俳優。ティアニーのキャリアは50年以上にも及ぶ。80本を越える出演作の中で、セシル・B・デミルの『地上最大のショウ』、ジョン・ヒューストンの『女と男の名誉』など名作も数多い。

1919年3月15日、ニューヨークはブルックリン生まれ。俳優スコット・ブラディの兄。マンハッタン・カレッジで教育を受け、学生時代は陸上競技の選手だった。短い舞台経験を経て43年映画界入り、リチャード・ディックス主演「THE GHOST SHIP」の脇役でデビュー。45年、『犯罪王デリンジャー』で殺人鬼を演じ有名になった。その後は冷酷な悪人やタフな男を演じ、活躍。私生活では酔っ払い運転、73年にはマンハッタンのバーで刺されるなど一時期荒れた生活が続いた。また、『新スター・トレック』『探偵レミントン・スティール』など100本を越えるテレビ映画に出演。

【フィルモグラフィ】
「THE GHOST SHIP」(43)、『犯罪王デリンジャー』『バターンを奪回せよ』(45)、『荒野の三悪人』(51)、『地上最大のショウ』(52)、『愛の奇跡』(63)、『カスター将軍』(68)、『誘拐!暴行!銃撃!新聞王謎の令嬢パトリシア』(TV)『謎の完全犯罪』(75)、『アンディ・ウオーホルのBAD』(77)、『グロリア』(80)、『ミスター・アーサー』(81)、『ローズマリー』(82)、『女と男の名誉』(85)、『必殺マグナム』(86)、『シェイクダウン』(88)



エディ・バンカー〈Mr.ブルー〉
EDDIE BUNKER as Mr.Blue

バンカーが今まで過ごしてきた実生活は、そのままこの映画で彼が演じた役柄とよく似ている。前科のある彼は、現在の作家業・俳優業に転向するまでに、何度も〝盗み〟を企ててきた。75年に彼は出獄したが、それまでの半生のほとんど全部を獄中で過ごしている。17歳の時、彼はサン・クエンティンで一番若い囚人となり、それ以降、文書偽造罪や武装強盗等の犯罪で、刑務所の出入りを繰り返した。獄中で物書きになりたいという希望を徐々に自覚し始めるが、シャバではどうしても落ち着けずに、また刑務所に舞い戻るという生活が続いた。

彼の最初の小説となった「NO BEAST SO FIERE」が出版された後、ダスティン・ホフマンと出会う。それが彼の生活を一変させるものとなった。ホフマンはその本を読んで、映画化することを申し込み、後にそれが『ストレート・タイム』となり、バンカーもゲスト出演している。次には『アニマル・ファクトリー』と『リトル・ボーイ・ブルー』を執筆。

さらに85年『暴走機関車』の脚本化に手を貸している。

最近では、ジェフ・ブリッジス、エドワード・ファーロング主演の『アメリカン・ハート』で、テクニカル・アドバイザーをつとめ、出演も兼ねている。



QUENTIN TARANTINO

クエンティン・タランティーノ〈監督・脚本〉
Director:QUENTIN TARANTINO

〝観客は襟をわしづかみにされ、激しく揺さぶられる!〟と評され、衝撃的なデビューを飾ったタランティーノ監督は、米ユタ州にあるサンダンス・インスティテュートを卒業したばかりの28歳の新鋭である。彼がサンダンスのディレクターズ・ワークショップ&ラボから戻るのを待って、リハーサルが91年7月の初めから2週間にわたって行われた。

彼は、俳優としてのキャリアを先にスタートさせていた。長い間、俳優のジェームス・ベストとアラン・ガーフィールドのもとで演技の勉強をし、NBCの賞に輝く『ゴールデン・ガールズ』といったテレビ・シリーズや舞台等に、端役で出演していた。

86年頃、方向を変えて脚本を書き始めた。彼は今まで映画学校等で正式に学んでいなかったにも拘らず、自分の脚本を自分で監督するということを目標にした。ビデオの電話セールス員をして生活を支えながら、彼は最初の脚本「トゥルー・ロマンス」を完成させ、続いて「NATURAL BONE KILLERS」を書き上げた。



そして、90年10月にロサンゼルスでゲリラ的にモノクロ16ミリで撮影しようとしていた『レザボア・ドッグス』が、ついに彼を監督の椅子に送り込むことになる。56年に作られたS・キューブリックの『現金に体を張れ』に刺激され書き上げられたものだった。この映画を製作しようと、資金繰りに動き回っている時、脚本がサンダンスのディレクターズ・ワークショップ&ラボで高く評価され、受け入れられた。本格的な撮影に先駆けて、サンダンスにて、シドニー・ポラック、テリー・ギリアム、フォルカー・シュレンドルフなどのもとで10日間にわたる監修を受けた。その中の一人であったモンテ・ヘルマン(製作総指揮)の積極的な参加と、プロデューサーに名前を連ねる程この企画に興奮したハーヴェイ・カイテルの協力により始動した。

「僕には僕のビジョンがあり、僕が望んだことはこの基本的なレベルの情熱をはっきり形にすることだった。この映画のチームは僕が投げたボールを受け取り、それを持ってゴールに走ってくれた。少なからず僕の予想を越えた働きをしてくれながら。いつも僕はパットンの一節『もしあなたが人に、どうやってやるかではなく、何をやるかだけを伝えれば、あなたはきっと彼らの工夫力に驚かされることであろう』という言葉に導かれて仕事をしてきた。そしてそれは、今回みんなが僕に見せてくれた仕事そのものなのだ」と、最高のチーム・ワークで作られたこの作品の誇りを語っている。

本作以後は、ルトガー・ハウアー主演の『ミッドナイト25時ー殺しの訪問者』(91)でアソシエート・プロデューサーとして名を連ねており、さらに彼の初執筆作品「トゥルー・ロマンス」が現在撮影中である。監督はトニー・スコット、出演はC・スレーター、D・ホッパー、G・オールドマン、V・キルマー、C・ウォーケンという豪華な顔ぶれ。彼にとってのメジャー・デビューとなる。

INTERVIEW

Q: 「レザボア・ドックス」の制作のきっかけは何ですか。

A: これは3作目の脚本でね。その前の2つも映画化しようと、あらゆる所に売り込みまくり続けた。5年も。だけど、どうやったって誰も僕には映画を作らせてはくれない事を、その5年間に思い知らされたのさ。そこで、最初の脚本「トゥルー・ロマンス」を売って、3万ドルの自己資金を作ったんだよ。

悔しかったね、脚本を売るのは。自分の身を切られるような思いだった。腹も立った。その勢いで、強盗を終えて、犯人が一人一人約束の場所に集まるという8年ほど前に考えていた話をもとに、「ドッグス」を4週間で一気に書き上げた。そしてそれを、自分の3万ドルを使って友人



に出演してもらい、16ミリ映画にする事にしたのさ。

ところが、脚本を読んだパートナーのプロデューサーがこれまでの経験にめげもせず、すごく面白いからもう一度売り込もうと言うんだ。僕はまた何年も無為な日々を過ごしたくなかったので、2カ月と期限を切って3度目の挑戦に挑んだ。ただし今度は、駄目なら16ミリで作れば良いと腹をくくっていたので、これまでの2作とは異なり、話し合いでは一切相手と妥協をしなかった。それが良かったのかも知れない。次々と協力者が現れて、劇場映画化が実現したんだよ。

Q: ハーヴェイ・カイテルもそんな協力者の一人ですね。

A: 知合いの紹介で「ドッグス」を読んでもらったんだが、3日で返事が来た。「気に入った」って。本当に嬉しかったね。ハーヴェイはもともと、僕の大好きな俳優だったから。

どのような役でも見事にこなす、うまい俳優は今でも沢山いるけれど、彼のような存在感のある役者は少なくなったと思う。ハーヴェイは演じていると言うよりも、役を自分に近づけてしまうんだよ、ロバート・ミッチェムがそうだったように。日本では僕の大好きな、Sonny Chiba 千葉真一さんがそういう役者の一人だと思うね。



ハーヴェイが出ると言ってくれた事で、資金繰りが楽になった。作品の信用が増して、お金が借りやすくなったのさ。

Q: そもそも、どのようなきっかけで映画監督になろうと思われたのですか。

A: 僕は母一人子一人の、いわゆる鍵っ子で、小さな時からTV、ビデオ、それに映画は僕の大事な友だちだった。言って見れば、「ムービング・ピクチャー・オタク」かな。それで物心ついた頃から、自分は映画に関わる仕事をするんだって思い込んでいたんだよ。

映画の仕事って言うとまず俳優を考えるんじゃないかな。僕もそうでね。で、初めは役者になろうと学校にも通った。でも、しばらくして気がついたんだ。彼らには、うまく演じられる事が最大の関心事だけど、僕は、どんな映画が出来上がるかにいつも一番興味がある。僕と仲間とは、求めているものが違うなって。

それからさ。ビデオ・ショップに勤めながら、暇を見つけては16ミリを撮るようになった。監督になるための正式な教育は受けていないから、16ミリが僕の先生だよ。

Q: どんな映画や監督がお好きですか。

A: B・デ・パルマ、H・ホークス。好きな監督を上げ出すときりがないよ。ただ、一般に親は子供の見る映画にいろいろと制限を加えるものだけれど、うちの親はポルノ以外、どんなジャンルのものでも連れて行ってくれた。「暴力映画を見ると子供が暴力を振るうようになる」なんて、ナンセンスだと言って。だから僕は5歳くらいの時から、がんがん犯罪映画を楽しんでいたんだよ。

日本の作品は子供の頃からの馴染みさ。まずTVマンガ。「マッハGO!GO!GO!」は主題歌も歌えるよ。それと僕はロサンゼルス出身だからね、日本語のTV局があるんだ。日曜日の午後8時からは毎週、「影の軍団」をやっていた。交代で仲間の家に泊まりに行っては、みんなでTVの前に、釘付けになったものさ。そして、最後のソニー・チバのコメントをみんなでわいわい、「ほらな」って言いながら聞くんだ。

そんな影響かな、70年代にカンフーが大流行した時にも僕は、ソニーの「殺人拳」などの方が香港のものよりも面白かった。そして80年代に入り、言葉も分からないまま日本のやくざ映画を見まくった。タイトルも監督の名も分からないままに。

来日して、手当たり次第見た日本映画で、大好きだった多くの作品が深作欣二監督のものだと知り、どうしても会いたいと熱望。雑誌の取材で京都まで深作監督に会いに行く事になる。京都撮影所に向かうタクシーの中で、タランティーノは一言も口をきかなかった。いつもは人一倍おしゃべりの彼が、である。

東京で買ったばかりの「ガンマ3号宇宙大作戦」のLDにサインをもらった後に、ホテルのレター・ヘッドの付いた厚地の紙を2枚出して、「ジムとディックという友人のためにも」と深作監督にサインをお願いする。それが終わると、取材中ずっと緊張していた表情が、笑み崩れた。それは、映画少年の幸せな顔だった。

Q: 犯罪映画のどこに魅かれるのですか。

A: 乱暴な言い方をすれば、どこのギャング映画でも、話はだいたい似たり寄ったり。言葉が分からなくても筋を追う事が出来るんだよ。だから逆に、それぞれの国の文化や習慣がはっきりと現れるのだと思う。

主人公が殺人を犯す場面でもアメリカでは、観客に嫌われるとまずいなどと妙な清教徒意識が強くて、理屈を付ける事が多い。今回でも、ミスター・ホワイトとミスター・オレンジの関係の説明が希薄だとよくアメリカでは言われたんだよ。アジア、特に日本では決して生まれて来ない疑問だね。

フランスにはフランスの男の友情の描き方があり、イギリスにはイギリスと、国によって変化するさまざまな描写の違いを、犯罪映画は他のジャンルよりも鮮明に見せてくれると僕は思っている。そんな違いが僕には、とても面白い。

Q: 他のジャンルに興味がない、と言うことではありませんね。

A: もちろん。さっきも言った通り僕は「ムービング・ピクチャー・オタク」さ。映画ファンには2通りあってね、好きな映画しか好きでない人と、映画なら何でも好きなファンがいる。僕は明らかに後者だよ。

次回作は9月にクランク・インする「パルプ・フィクション」で、これも3つの犯罪がテーマの犯罪オムニバス映画なんだ。でもその後は、恋愛映画を作りたいと思っている。それも、とてつもなくロマンチックなのを。

小林礼子(文・構成)

PRODUCTION

『レザボア・ドッグス』は、監督Q・タランティーノとプロデューサーL・ベンダーにとってまさに"ドリーム・カム・トゥルー"だった。90年10月に脚本が出来た当初、2人はLAのストリートでゲリラ的に16ミリで撮影し、お互いMr.ピンクとエディの役をやることで準備を進めていた。しかし何とか資金を集めるために彼らの演技コーチに脚本を持ちこんだところ、主演にイメージしていたH・カイテルを紹介してもらうことになり、脚本の面白さに狂喜したカイテルの協力を得ることに成功する。これをきっかけに、タランティーノのもとに製作者・俳優が集まり、この若い監督の初めての劇場用作品が実現した。



●ハーヴェイ・カイテルの証言

脚本を読んでその内容に興奮したね。裏切り、信頼、忠誠について書かれた非常に素晴らしい作品で、これは絶対映画化にこぎつけたいと思い、クエンティンとローレンスに製作について何か出来ることがあれば手伝いたいと申し込んだんだ。上り坂の若い才能ある人たちとの仕事は、まるで素晴らしい旅行のような気分だった。情熱ある人々の集まったプロジェクトで、皆力のこもった仕事をした。特に若いクエンティンは、ある種のカルチャーとその支持層が必要とする入り組んだ物語を見事に書き上げたスゴイ奴だ。犯罪者たちが裏切りに直面したときに表出するそれぞれ異なった感情——信頼、忠誠、誇り、自尊心などが物語全体の「カギ」となっている。ただの宝石強盗映画とはひと味もふた味も違う。

●ティム・ロスの証言

これは今までに僕が手にした脚本の中でも最高傑作の一つだ。クエンティンほどエネルギーに満ち、とても細やかな気配りを自然にできる人物は他にいないよ。

●製作総指揮リチャード・N・グラッドスタインの証言

クエンティンはまれに見る素晴らしい才能の持ち主だ。初めての監督作で、これだけ上手に素材を料理し、どのように撮影を進めていくかというはっきりとしたビジョンを持っていた例はこれまでに見たことがない。



NOTES

リハーサルは91年7月の初めから2週間にわたって行われた。クランク・インは7月29日。撮影期間5週間。

ロサンゼルスを舞台にした映画を撮りたいといつも考えていたクエンティンは、美術担当のディヴィッド・ワスコらとロスの街を歩き回った。強盗団が落ち合う倉庫は、59番街フィゲロア通りにある、以前死体安置所として使われていた小屋だ。またダウンタウンにあるビバリーストリートとセカンドストリートの間にあるスプレー落書きの壁面は、私服警官と同僚が密会する場面で使われた。クエンティンはギラギラの高層ビルよりも汚らしい裏通りを好んでロケ地に選んだ。

さらにワスコらは、かつて死体防腐処置室だったと思われる部屋を私服警官の怪しげなアパートにうまく作りかえた。私服警官がコミックおたくという設定だったため、部屋にはコミック・ヒーローたちのピンナップがちりばめられた。

クエンティンは言う「本当はジャック・キルビーの『シルバー・サーファー』を使いたかったが見つからなかった。そこでキルビー風の新しいオリジナル・キャラクターをマニエル&ダニエル・ビリャリボスに作ってもらった。それが『カミカゼ・カウボーイ』のポスターとコミック本で、彼らのデビュー作ともなったわけさ」。



●クリス・ペンの証言

脚本を読んだ時、ナイスガイ・エディは俺がやるんだという予感めいたものが沸き上がってきた。エディは誰かが自分や家族や友達を下手なことに巻きこんだりしない限りとても忠誠心の厚い奴で、その名の通り〝いい奴〟なんだ。

●ローレンス・ティアニーの証言

（若い役者たちを評して）誰もが才能ある俳優たちだ。しかし、はっきり言ってクエンティンの脚本家、監督としての才能には舌を巻いたね。





●スティーヴ・ブシェーミの証言

まず僕が惹かれたのは、ショッキングでファニーな登場人物たちのキャラクターだ。それぞれ特別な何かを持っているのだけれど、それは誰もが心の中に持っているものなんだ。これは男の物語だけれど、必ずしも男だけの映画ではない。



●マイケル・マドセンの証言

クエンティンの最初の脚本「トゥルー・ロマンス」（トニー・スコット監督）を気に入っていたので、今回のことを知ってエージェントに電話したら僕自身が候補に上がっているというんだ。脚本を読み、Mr.ブロンドの役をやらないかという申し出を受けた。クエンティンは役者を決めるのにとても潔かったと思うよ。彼は安全パイに逃げることなく、ありきたりであることを避けた。Mr.ブルー役のエディ・バンカーは前科者なんだけど、彼が映画のようなことはよく起こるんだと教えてくれた時には、何かすごく興奮したね。



小粒だが創意に富んだ70年代ポップス

湯浅　学（音楽評論家）



ラジオは街の顔である。アメリカ各都市各田舎、どこにでもその街だけの独自の色を持った放送局がありプログラムがある。様々なDJがいる。ロサンゼルスならAM、FM合わせて50局ぐらいはあるのではなかろうか。ジャンルもムカデの足のようにあれこれ揃っている。『レザボア・ドッグス』の背景を描くFM局は、70年代ポップス専門の〝スーパー・サウンド'70'S〞。DJはKビリーというもっさりとした男。クールというよりダーティーで、ダルい感じのしゃべりである。

いわゆるオールディーズ、昔日のポップス専門局はこれまた各地市に2つや3つは確実にあるが、こんなに覇気のない野郎が日がな一日やってる局、それも70年代専門てえのはめずらしい。ナイスじゃないか。このKビリーってやつは30代後半、四捨五入して40歳ぐらいのやつだろう。実は俺もそうだ。

スペシャル・サンクスにハリー・ニルソンの名があるからなあ。70年代、それもディスコ以前のポップ・シーンは、60年代のような激しい動きもなく、小粒だが創意に富んだひとくせあるやつがヒョコヒョコ出入りする、といった感じだった。なんとなくフュージョン、ジャンルから少しづつはみ出していて他の要素と混ざり合っている曲が多かった。

でき上がりきっていない奇妙な味わい。キマリすぎていないちょっとマヌケな感じ。

それがこの映画のハードだが珍奇なドラマの空気と見事にシンクロしている。中ぶらりんだがヤクザな世界。それもディスコの狂い咲きでしばらくヒット・チャート・シーンからは消え去ってしまうわけだが。

オープニングのマドンナの「ライク・ア・ヴァージン」談義にゃあきれて、えらく感心させられた。なんというまさだ。これだけくだらねえまじめな会話はおいそれと作れるものではない。タランティーノ恐るべし。

そのマドンナ話からチップでもめて、オープニング・クレジット。そのバックでかかるのがオランダのジョージ・ベーカー・セレクションが70年3月にヒットさせた「リトル・グリーン・バッグ」。全米ポップ・チャート21位のスマッシュ・ヒット。曲の展開がラテンのようなカントリーのようなテックス・メックスのような。ハンパな魅力たっぷりだ。

ホワイトとピンクによる警官ぶんなぐりシーンのド・ファンクは、ディープ・ソウルのヴェテラン（1955年デビュー）ジョー・テックス72年1月の大ヒット曲「アイ・ガッチャ」である。ポップ・チャ

THE SONGS

"LITTLE GREEN BAG"
PERFORMED BY GEORGE BAKER SELECTION
WRITTEN BY JAN GERBRAND VISSER AND BENJAMINO BOUWENS
PUBLISHED BY SCREEN GEMS-EMI MUSIC PUBLISHING INC O/B/O
EMI MUSIC PUBLISHING HOLLAND B.V.

"STUCK IN THE MIDDLE WITH YOU"
PERFORMED BY STEALER'S WHEEL
WRITTEN BY GERRY RAFFERTY AND JOE EGAN
PUBLISHED BY SCREEN GEMS-EMI MUSIC PUBLISHING INC O/B/O
DEESTOKE LTD. & BABY BUN MUSIC LTD.
COURTESY OF A & M RECORDS

"I GOTCHA"
WRITTEN AND PERFORMED BY JOE TEX
PUBLISHED BY TREE PUBLISHING CO., INC.
COURTESY OF TREE PRODUCTIONS

"FOOL FOR LOVE"
WRITTEN AND PERFORMED BY SANDY ROGERS
PUBLISHED BY RATTLESNAKE WRITERS

"HOOKED ON A FEELING"
PERFORMED BY BLUE SWEDE
WRITTEN BY MARK JAMES
PUBLISHED BY SCREEN GEM-EMI MUSIC PUBLISHING, INC.
COURTESY OF EMI RECORDS USA
A DIVISION OF CAPITOL RECORDS, INC.
BY ARRANGEMENT WITH CEMA SPECIAL MARKETS

"COCONUT"
WRITTEN AND PERFORMED BY HARRY NILSSON
PUBLISHED BY EMI BLACKWOOD MUSIC, INC.
COURTESY OF RCA RECORD LABEL OF BMG MUSIC

"HARVEST MOON"
PERFORMED BY BEDLAM
WRITTEN BY RUSHTON MOREVE & JOHN KAY
PUBLISHED BY DUCHESS MUSIC CORPORATION AND KINGS ROAD MUSIC
RIGHTS ADMINISTERED BY MCA MUSIC PUBLISHING,
A DIVISION OF MCA MUSIC INC.
COURTESY OF RCA RECORDS

"WES TURNED COUNTRY"
WRITTEN BY NIKKI BERNARD
COURTESY OF OLE GEORG/CAPITOL PRODUCTION MUSIC

"COUNTRY'S COOL"
WRITTEN BY PETER MORRIS
COURTESY OF OLE GEORG/CAPITOL PRODUCTION MUSIC

"IT'S COUNTRY"
WRITTEN BY HENRIK NIELSON
COURTESY OF OLE GEORG/CAPITOL PRODUCTION MUSIC

SOUNDTRACK BY MCA VICTOR





ート2位、R&Bチャートでは堂々第1位。名曲揃いのジョー・テックスだが、これは代表曲のひとつである。

ブロンドによるさらにエグい警官リンチのBGMは、73年3月全米第6位を記録したスティーラーズ・ホイールの「スタック・イン・ザ・ミドル・ウイズ・ユー」。この曲の作者のひとりゲリー・ラファティはソロとして、78年に「霧のベーカー街」を大ヒットさせた人である。すっとぼけた架空のカントリー・ロックという感じである。

イントロだけがひょっこり使われている「フックド・オン・ア・フィーリング」はブルー・スウェード74年4月の全米1位の大ヒット曲。彼らはスウェーデンのバンドだ。スウェーデン・バンド初の全米1位作品だが、この曲もともとは「雨に濡れても」で有名なB・J・トーマス69年のヒット曲で、それを72年に英国の変人、いや鬼才ジョナサン・キングがカヴァーした際にこの〝ウガチャガ・ウガウガ〟のイントロをくっつけた。ブルー・スウェード・ヴァージョンはそのジョナサン・キング・ヴァージョンのカヴァーである。イントロと本編の落差が楽しい。

エンディングは名曲「ココナッツ」。ハリー・ニルソン72年の名アルバム『ニルソン・シュミルソン』からの3枚めのシングル・カットで全米8位のヒット。太陽の光にぼうっとした頭をベランダに放り出しているような虚無感に、軽いめまいが。





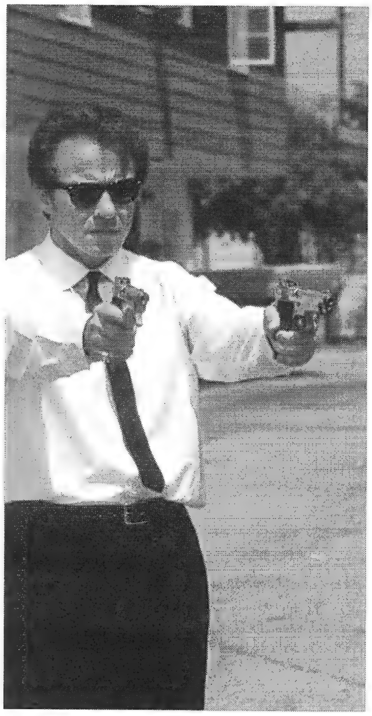
レザボア・コロッケ
RESERVOIR CROQUETTES

「レザボア・ドッグス」

料理:CUEL(ハギワラトシコ・山田　亮)
撮影:小泉　佳春

どうだっていいじゃない、どうせ食べちゃえば同じじゃないか、などと思うことなかれ。これは縁起をかつぐ食事です。
小さなコロッケを揚げて、それをまたポテトの親生地で包み、パン粉をつけて揚げます。
子持ちコロッケ(レザボア・コロッケ)を食べれば子宝に恵まれます。子ども、または子分、の質よりも量に特に効き目があります。欲しい数だけ子コロッケを入れてください。
材料も揚げ油の温度も普通でできます。

材料の目安に一じゃがいも1.5kg 牛ひき肉200g たまねぎ1/2個 ゆで卵2個 ゆでたほうれん草1把分 塩、コショウ、ナツメグ各少々 小麦粉、溶き卵、パン粉(普通のパン粉にクラッカーとコーンフレークを砕いて混ぜたもの)、揚げ油、バター各適量



クライム・ストーリーの秀作を作ろうとした時、話の展開上ガン・アクションは不可欠だ。しかし誰もがガン・アクションを撮れるわけではない。ガン・アクションを作るには音楽と同じように独特の感覚と呼吸が必要になる。その感覚をどうやって養ったかが、映画監督の種類を分ける。

僕は監督のインタビューの最中、頃合いを見てショルダー・ホルスターから吊るしたベレッタ92Fを抜いた。この新鋭監督がどのくらい銃が好きで慣れているか、試すつもりだった。その人の銃の触れ方で、僕には分かる。僕はベレッタをクルッと回してグリップを監督に差し出した。

監督は右手でベレッタを持った。カメラマンに向けて、撃つポーズをしたりする。僕には彼がガンフリークでもなければ、プロの射撃訓練を受けたことも無いことが分かった。銃が好きなら見た瞬間に目の表情が変わる。構え方を見れば、射撃訓練を受けたことがあるかどうかが一目で分かるのだ。

監督は銃へのこだわりから、このクライム・ストーリーを作ったのではない。彼は無数の映画を見、本を読んでいるクライム・ストーリーのマニアなのだ。彼はそこから自分なりのガンアクションの感性と呼吸を身に付けたに違いない。



「誰でもクライム・ストーリーを作れるってもんじゃないぜ」 小峯隆生(ハードボイルド作家志望)

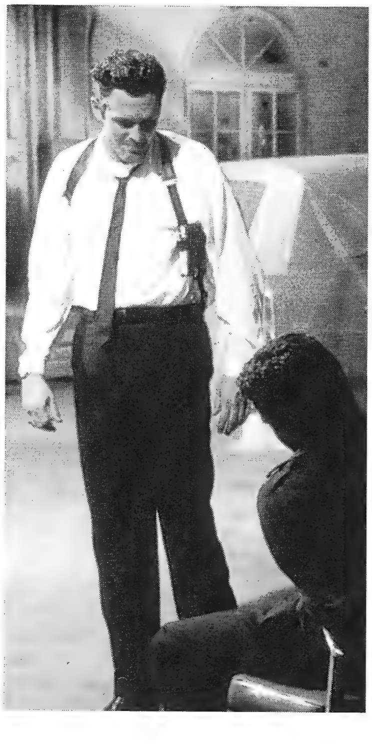
「凄い」と思った。

例えば出会い頭の銃撃戦のシーン。警官もギャングも会った瞬間にありったけの弾を撃つ。ガンファイトで瞬時に決着を付けるには気合と勢いで一気に撃ちまくるしかないのだが監督はこの呼吸を知っている。

あるいはホルスターを使わないこと。プロの犯罪仕事人は、仕事の時以外は常に一般市民のなかに隠れている。拳銃だけならどこかにポイと捨てられるが、ホルスターは瞬時に身から外せない。警官はホルスターがあるだけで銃を所持していたと判断できるし、ホルスター付きの銃を捨ててもいいが、そうすると現場に二つの証拠を残すことになる。だから彼らはホルスターを使わないのだ。

では、なぜブロンドだけはホルスターを付けているのだろうか?

それは、こいつがマッチョとフェティシズムの快感の地獄にどっぷり漬かっている野郎だからだ。すなわち、ホルスターにぶち込んだ拳銃を所持している自分の肉体に酔っているのだ。『タクシー・ドライバー』で、デ・ニーロが鏡の前に立つシーンがあったが、あれと同じである。監督はホルスターを装着するという簡単なことで人物設定を最もシンプルに説明しているのだ。「ハードボイルドとは文体がシンプルなこと」とはロバート・B・パーカーに会ったときに聞いた言葉。表現がシンプルなほど、ハードボイルドのレベルは高まるのだ。

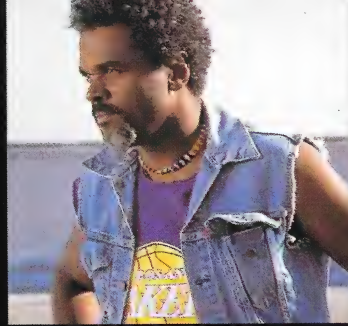


アクション映画は、ただ銃を撃ち、ナイフを振りかざし、殴るだけでは成り立たない。暴力を奮うものの力と被害者の痛みが、絶妙のハーモニーを奏でているのだ。そのバイオレンス・ハーモニーが奏でられた瞬間、ハードボイルドは身体のなかで舞いはじめる。このハーモニーを撮れる監督は、実はごく少数しかいない。

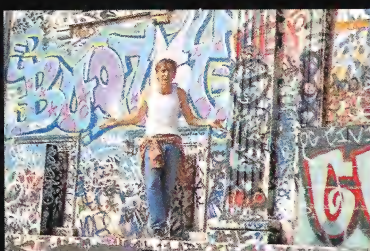
ブロンドが剃刀を振り払う時にみせる「一瞬の間」――そのカット割りのゾクッとするほど絶妙な「間」は、撮影所で何十年アクション映画を撮ったからといって作れるものではない。タランティーノ監督は、この映画の脚本を書いた瞬間から持って生まれた才能を目覚めさせ、爆発的なスピードで増殖させたのだ。警官の皮膚が剃刀でパックリと切り開かれたことを体感する、あの絶妙な「間」に、僕は自分自身の才能に目覚めたものしか持ちえないハーモニーを感じるのだ。

凄い野郎が現れたのである。





ホルダウェイ捜査官：囮捜査官は名優になれ。
マーロン・ブランド並の名演をしろ。最高に自然な演技だ。
Look, man, an undercover cop
has got to be Marlon Brando, man.
To do this job, you gotta be a great actor,
you gotta be naturalistic.
You gotta be naturalistic as hell.

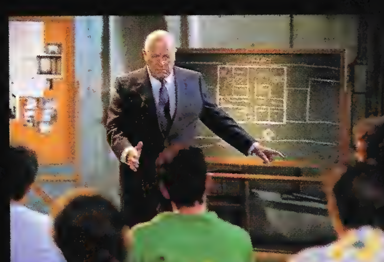






ジョー：おまえらに仇名をつける。
当然のことながら、お互いに本名で呼び合う事を絶対に禁止する。
プライベートな話もしてはならない。口がむずむずする時は、明日の事を話せ。
We're gonna be using aliases on this job.
Under no circumstances do
I want anyone of you to relate to each other by your Christian names.
All I want you guys to talk about... is what you're gonna do.

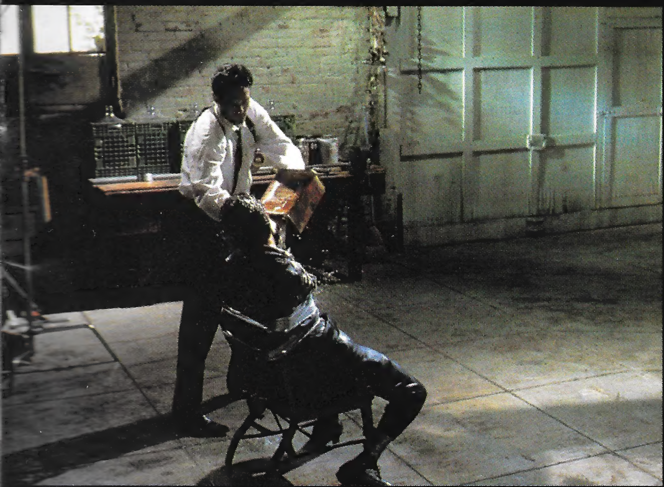




Mr.ホワイト：質問に答えなかったら、指を切ってやれ、小指でいい。
"次は親指だ"と脅せば、女装趣味まで白状する。

If you wanna know something and he won't tell ya,
cut off one of his fingers——the little one——
then tell him his thumbs's next.
After that, he'll tell you if he wears ladies underwear.











ナイスガイ・エディ：ラリー、あんたはダチだし、尊敬もしているが、
もし銃を下ろさなければ、あんたの心臓に穴があくぜ！

Larry..., we have been friends, and I respect you.
But I will put fuckin' bullets right through your heart
if you don't put that fuckin' gun down... NOW !



S U B T I T L E S

字幕を終えて

齋藤敦子

字幕の仕事は、翻訳を終えて初号の試写を見て直しを入れてしまうと、やれやれ一段落。それで、そのままになってしまう作品と、試写室に紛れ込んで見直してしまったりする作品がある。『レザボア・ドッグス』は後者だ。ティム・ロス、スティーヴ・ブシェーミ、マイケル・マドセンと好みの役者が揃っていることもあるけれど、曙が勝つ相撲より舞の海が勝つ相撲の方が見ていて断然面白いのと同じ類の、後を引く味があるのだ。

この映画の一番の特徴は、タランティーノのおたくぶりである。黒ずくめの男たちがマドンナの話をしている開巻早々のシーンも傑作だが、Kビリーの選曲も渋いし、『大脱走』のチャールズ・ブロンソン、リー・マーヴィン、アン・フランシス、パム・グリアと、出てくる名前が凝っている。パム・グリアというのは、『アパッチ砦ブロンクス』で、殺人鬼の娼婦を演じた黒人女優。ティム君演じる囮捜査官はかなりのシネフィルであることがわかる。

翻訳は楽しかったが、同時代の文化を共有していないための難しさがあった。全然わからなかったのは、元締めのジョーが『ファンタスティック・フォー』に出てくる"ザ・シング"にそっくりだとティム君が相棒の捜査官に説明するところ。『マグニフィセント・セブン』なら『荒野の七人』だが、3人減ってSFホラー系になるらしいこの作品が、映画なのかTVなのか、それともコミック・ブックなのか見当もつかない。でも、世の中には凄い人がいるもので、この難問を『宇宙忍者ゴームス』とあっさり解いてくれた人がいた。それが、翻訳の大先輩で週刊文春のシネマ・チャートを担当している芝山幹郎さんである。そのうえ、ラドラ・ハイツとパロス・ヴェルデスがどう違うかも教えてくださった。以後、芝山さん宅方面には足を向けて寝ていない。

翻訳者に必要なのは、語学と日本語力、それに物知りの知人を沢山持つこのなのである!











平成５年４月24日発行
編集　ヘラルド・エース
編集協力　三宅久美子
デザイン　海老名 淳(Verve Inc.)
発行　ヘラルド・エース
定価　600円(税込)

RESERVOIR DOGS

HARVEY KEITEL/TIM ROTH/CHRIS PENN
STEVE BUSCEMI/LAWRENCE TIERNEY AND MICHAEL MADSEN

LIVE AMERICA INC. PRESENTS/A LAWRENCE BENDER PRODUCTION IN ASSOCIATION WITH MONTE HELLMAN AND RICHARD N.GLADSTEIN
A FILM BY QUENTIN TARANTINO=HARVEY KEITEL,TIM ROTH,CHRIS PENN,STEVE BUSCEMI,LAWRENCE TIERNEY AND MICHAEL MADSEN
=RESERVOIR DOGS/MUSIC SUPERVISOR=KARYN RACHTMAN/COSTUME DESIGNER=BETSY HEIMANN
EDITED BY SALLY MENKE/PRODUCTION DESIGNER=DAVID WASCO/DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY=ANDRZEJ SEKULA
CO-PRODUCER=HARVEY KEITEL/EXECUTIVE PRODUCERS=RICHARD N.GLADSTEIN, RONNA B.WALLACE AND MONTE HELLMAN
PRODUCED BY LAWRENCE BENDER/WRITTEN AND DIRECTED BY QUENTIN TARANTINO
PRESENTED BY PIONEER LDC/DISTRIBUTED BY HERALD ACE,INC.NIPPON HERALD FILMS,INC./SOUNDTRACK BY MCA VICTOR DOLBY STEREO